慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	唯物史観と人間
Sub Title	The materialistic view of history and 'Men'
Author	三浦, 和男(Miura, Kazuo)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1966
Jtitle	哲學 No.48 (1966. 3) ,p.1- 20
JaLC DOI	
Abstract	The aim of this paper is to provide a key for clearer understanding of the materialistic view of history. And for this purpose the author tried to shed light upon the rather abstracted 'men' figuring in the view, for it is this very aspect of the view, around which most of criticisms against it are brought forth. The paper is subdivided into four parts. The first of the means to formulate the problems raise by critiques, namely the alleged fatalism include in the view. The second tries to elucidate the level of abstraction on which the view is based Generally speaking, the 'men' represented in this view are not psychic subjects who select freely among alternatives, but the agents seemingly determined to act one way or other. So the author explained how was it possible to treat 'men' this way, by examining Marx's notion of "personlification of social relations." In the third part this 'personification of social relations' which seems objectively structual, is again exposed as merely fixed for of objectivation of human activity under certain condition. And from this ex -position the author goes further t distinguish two kinds of human action in society: the first one, by which men make history more or less involuntarily, and the second, b which men make history more or less voluntarily and consciously on the ground provided by former action. The last part tries to answer the questions raised in the first part.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000048-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

唯物史観と人間

三　浦　和　男

I

唯物史観にたいしては，あらゆる可能な角度から疑問が提出され，論難の矢が放たれているかに見える．多少なりとも肯綮を射たものから，まったく的はずれなものまでをふくめるならば，きわめて多彩な外観を呈している．けれども，これらをやや接近して概観してみるならば，驚くべき景観が展開されているのがわかってくる．奇態なことだが，まったくおなじような指摘が，むろん少しずつ力点の修整を加えられつつ，陳腐にむし返えされているのである．それは，唯物史観の公式性とか，それの唱える‘歴史的必然性’の誤ちとか，にたいする指摘なのである．

いうまでもなくそれらの具体的な内容や体裁や提出のされ方は，人々によってひどくまちまちである．Marxism は歴史を過度に単純化し，いっさいを“生産力と生産関係の矛盾”という狭隘な公式に押しこめようとするとか，上部構造は土台の経済的要因のみからでは説明されないとかといわれる．あるいは，この全体論的=宿命論的歴史観には人間の自由のはいる余地はなく，人間抜きの歴史観でおるとか，人間はかならずしも経済的利害のみを追求する主体ではないのに，Marxism は人間をそのようなものと想定することによって，人間を一面化しているとか，ひどいばあい，一面で歴史の必然性を唱えながら，他面で実践を呼びかけるのは，自己矛盾であるとか，との宣告をもうける，さらには，このいわゆる経済史観の功績を承認しながら，同時にその一面性をも指摘して，他方で種々の制度的

要因や人間の個人的ないし大衆的心理要因を導入することによって，唯物史観の欠陥をあえて修整補足しようとする試みもあらわれる始末である．

Marx や Engels は唯物史観の輪郭をくっきりと描き，その簡潔な formulation に成功したころ，すでにつぎのように記している．《……人間の歴史的発展の観察から抽象されたもっとも一般的な結論をまとめたものぐらいは登場もできよう．が，こんな抽象物は，現実の歴史から分離してそれだけで見るなら，一ぺんの価値もない．それらは，歴史の材料の配列を容易にしたり，個々の局面の順序を示唆するのに役立つだけで，歴史の時期がそれを基準に正されたりする処方箋や図式を……断じて提供しはしない．反対に，過去の時期についてにせよ，現代についてにせよ，困難は，材料の観察や配列に，また現実の記述にとりくむとき，ここにはじめてはじまるのである[(1)]．》もちろんかかる指摘と，Marx や Engels が実際におこなった作業やその成果とは，いちおう区別されなければならない．しかし，このような自覚と指摘がおこなわれている以上は，それらが現実のかれらの作業 process の内部に何らの影響もなしにとどまるとは，とうていかんがえられないのである．

してみれば，われわれは唯物史観にのぞむさいの人々の上述のごとき態度を，どのように解釈していったらよいのであろうか？ Marx や Engels が，かのみずからの指摘にもかかわらず，おなじ穴のむじなに堕してしまったのであろうか？ それとも，唯物史観の批判者たちが，それの曲解にもとづいていわれのない論難を，それにむけているのであろうか？ が，そうなら，唯物史観の本質は何なのであろうか？ 私はこの小論において，うえに述べたいくつかの論点に自分なりの解答を出すことを試みながら，唯物史観における若干の側面，そこでおこなわれている抽象の意味とその妥当性などを検討してみたい．もちろんここでは，いずれの問題をも必要にして十分なかたちで論ずることはできない．けだし，これは，十分な準備にもとづく熟慮の産物ではなく，単なる自己了解の覚え書きにすぎない

からである．したがって，今後に期したやや体系的な論述への一つの Preliminary 以上に出ないことを，ご了承いただきたい．

註（1） Marx=Engels Werke, Berlin Bd. III S. 27.

II

In ihrer Verlegenheit denken unsere Warenbesitzer wie Faust. Im Anfang war die Tat. Sie haben daher schon gehandelt, bevor sie gadacht haben——
K. Marx: Das Kapital[1]

《資本論》や《経済学批判》などのような Marx の著作をひもどく読者が誰でももつとともに，ばあいによっては強い当惑を感じさせるような事実がある．それは，ここに展開されている世界が，いかにも人間の世界ではあるとはいえ，《人間》についてのわれわれのイメージとはおよそかけ離れた，ぎりぎりの経済的諸関係に還元された人間のそれ，社会的諸関係の Personifikation としてのみ問題とされた Person のそれにほかならない，という事実である．ここに登壇する主人公たちは，一面では，鉄の必然性をもって自己を貫徹する資本の力学に身を委ねて仮借なく労働者を搾取する産業資本家であり，他面では，飢餓という一そう過酷な運命を免かれんがために，ひたすら資本の Juggernaut のまえに，みずからを人身御供として捧げる労働者たちである．一方はがむしゃらに致富欲に駆られ，他方はあますところなく骨身をすり減らす……．かくして《……いっさいの利益を独占する大資本家の数が絶えず減少するにつれて，……絶えず膨張しながら資本主義的生産過程そのものの機構によって訓練され結合され組織される労働者階級の反抗もまた増大する．……生産手段の集中と労働の社会化とは，それらが自分の資本主義的外皮とは調和しえなくなる一点に到

達する．外皮は爆破される．資本主義的私有の最後を告げる鐘がなる．収奪者が収奪される[2].》ここでは，いっさいが自動機械の進行する過程であるかのように生起している．人々の自由な決断も，選択の余地ものこされていないかに見える．

意志的決断の主体であるはずの人間がかくも単純ないわば歯車的人間に還元されうるものであろうか？ Marx は，現実には多様であるはずの種々の人格的個人に暴力を加え，それに不当にも抽象的経済人の性格のみをあたえたり，環境に一義的な反応しか示さない受動的個人を前提したりして，出発しているのではないか？ 一般的にいって，Marx や Engels は唯物論の名のもとに，人間の精神のはたらきをあまりにも軽んじすぎたのではないか？

Marx や Engels 著作には，明らかに，意志的ないし心理的な決断や選択の主体としての人間から，諸問題に接近していくといった研究手続きは，きわめて稀薄であるか，まったくない，といえる．たとえば social grouping とか stratification の問題をかんがえていくさいにも，個人の種々の選択行為にたいする心理的動機といったものは，ほとんど考慮の外におかれている．この点で，value とか norm とか consent とかその他の心理的動機を重く見て，これらから人間の行動の類型や social dynamics をかんがえていこうとする近時の社会学的趨勢とは，いちじるしく対蹠的である．しかも，諸個人の意識問題は，《意識が存在を規定するのではなく，社会的存在が意識を規定する》といった一命題で片づけられているかの観がある．これにたいしては，《意識的=心理的主体としての諸個人は，類似の環境的=社会的動機があたえられるならば，類似の反応を示すことは事実であろうけれど，しかしこれも，ごく大ざっぱな傾向として確率的に一般化できるにすぎず，存在が意識を規定すると決定論の意味で一般化されるのであれば，誤っている》という異議がさし出されるのも，けだし当然である[3].

われわれが，人格的個人ないし意識主体としての個人から出発して，かれらが示すであろう蓋然的行動の一定の組合せないし相互作用といったものから，社会の構成や動態をおし計っていこうというのであれば，この異議はたしかに正しい．諸個人はそれぞれ個性をも性向をも異にし，同一の動機があたえられようとも，同一行動を選択するとはかぎらない．おなじく個人は種々多様の動向を示し，さまざまの方向にむかって目的を追求する．人格的個人といえども，またいずれかの環境的決定下に服しているが，だからといって，かれが経済的利害のみを追求する個人になるとか，宿命的に一つの選択のみをおこなうとかと結論したら，事実に暴力を加えることになるに相違ない．

では，Marx や Engels はこの事実を無視してかかっているのであろうか？　むろんそうではないようである．われわれは Stirner への反論として書かれた典型的な箇所を二つばかり引用しよう：

1)　個人の多様性に関して

《……あらゆる個人は，あらゆる他人とは完全に異なっており，独特である．おのおのの個人がそれぞれまったく別人であり，だから他者である以上，ある個人にとってよそよそしく，勿体ないものも，別の個人にとってはそうではないし，そうではありえないぐらいである．おまけに国家，宗教，習俗などといった共通の名称すら，われわれの目を欺けない．というのも，これら名称は，おのおのの個人の現実の Verhalten を抽象したものにほかならず，かつこれら諸対象は，それらにたいするおのおのの個人の完全に異なった Verhalten のために，かれらのおのおのにたいして，せいぜい名称を共有するのみで，それぞれ独特の諸対象，完全に異なった諸対象となっているからである.》(Marx: EngelsWerke Bd. 3. S. 266)

2)　ブルジョワに関して

《“吝嗇漢”とは……お説教めいた幼児の友や小説に広く登場しはするが，現実にはせいぜい異常人と見られる主人公で，いわんや吝嗇なブルジ

ョワの代表者では断じてない．この代表者なら“良心の苛責”や“名誉欲”などを拒む必要もないし，吝嗇という一つの情熱だけに自分をかぎることもしない．それどころか，かれの吝嗇は，政治だのその他だのの一連のたくさんの情熱をお供に連れており，ブルジョワはこれらを満足させるのをけっして犠牲にしたりはしない.》(Ebenda S. 230)

かれらにとっては人格的個人に関してかかる事実は，自明であったといえる．むしろこのことを自明の前提にして出発しているといってよいであろう．けれども，かれらはこの前提に立てばこそ，かえって一定の社会的役割の遂行者として登場する個人，もしくは社会的構成体内部の諸関係の Personifikation を，これとはさしあたり峻別したのである．かれらは，社会関係の Personifikation としての役割遂行者と意志的=心理的主体としての persönlicher Individuum とが混同されたとき，これを鋭く皮肉ったのであった[(4)]．もちろんかれらは，社会的関係が人格的関係に沿って構成されたり，統御されたりする可能性がいっさいないと見ていたのではない．その反対である．がそのためには，最少限度，社会を構成する諸個人が計画的にみずからの活動を統御できる可能性があたえられねばならない．けれども，この可能性は，社会の自然史的過程ないし自然生成的分業の内部ではのぞむべくもないうえ，しかもわれわれは歴史や社会の外部に，というより上位にいるのではなく，その内部にいるのである．

おしなべて社会的構成体とその諸関係は，歴史的にも社会的にも，所与のものとして諸個人に先行して客観的に存立して，一つの Zustand をなしている．といっても，このことは，ある社会的な客観的地位が特定個人に宿命的に押しつけられたり，指定されたりしていることをかならずしも必然的に意味するわけではない．もちろん，諸個人が生誕というたんなる事実のために，特定身分の刻印を押され，特定の役割を最初から遂行することをよぎなくされているがごとき歴史的関係は存在している[(5)]．またさら

に，特定階層出身の諸個人が，みずからにとっても接近しやすい職能を選択しがちの蓋然的傾向があったり，一階層からいちじるしくかけ離れた別階層への移行が，諸個人にとってひどい困難を意味したりすることも，たしかである．しかしながら《共産党宣言》における周知の指摘のごとく，困難も，個人の立場からすればしばしば克服されている．したがって，この点もさしあたり問題にはならない．むしろわれわれはこの先行という事実によってつぎの点に注目しなければならないのである．すなわち，社会的諸関係とそこにおける役割とが個人に先行して客観的にあたえられるものとすれば，偶然的個人の誰かがそれらを満たし，かつ担うであろう，という点なのである．逆むきにいえば，個人にとってまったく偶然的にあたえられている社会的役割を，人格的個人の誰かが果たしていく点だ，といってもよい．

このばあいにはそれを満たす個人がXであろうと，Yであろうと，いっこうにさしつかえはない．それを満たすさいに，当の個人がいかなる意図をもとうと，それも無関係である．特定Xがこの役割の任に耐えられなかったなら，別のYが，そしてZがかれにとって代ることになろう．

諸個人の recruitment さえ可能であれば，役割は果されるし，個人はこの役割の Personifikation として登場するのである．ちなみにいえば，諸個人の意志と個性が多様であればあるだけ，またかれらが環境に一義的に決定されていなければいないだけ，社会関係の Personifikation はそれだけスムースに成立する．

さて，そうだとすれば，われわれは，社会関係の Personifikation とその運動とを，意志的な人格的個人から，いちおう遊離できるであろう．個々の個人が社会的役割を担うさいに，どのようなイメージをもち，自己の活動をどのような価値観によって位置づけているかはわからない．自己の活動を観念のなかで呪いながら，それを遂行しているかも知れない．だが，いずれにしても Personifikation はそれだけで存続し，自己の運動をつづ

ける．Epigraph に引いた Marx の言葉はこの遊離化手続きを端的にかたっているのである[6]．これこそ，かれが自己の理論の展開にさいして，心理的接近を排除した理由であった．全体としてかかる役割を演じる個人がいるものと前提すれば，人格的個人を度外視して，役割り相互の関係と運動をある程度客観的に追求できるのである．《資本論》などの世界は，まずはこの抽象的世界なのである．一例をあげておこう．

《この運動の意識的担い手として貨幣所有者は資本家になる．かれの Person は，というよりも，かれのポケットが貨幣の出発点であり，帰着点である．かの循環の客観的内——価値の増殖——がかれの主観的目標であって，抽象的富をますますたくさん自分のものにすることが，かれの Operation を駆る唯一の動機であるかぎりにおいてのみ，かれは資本家として，つまり意志と意識とをそなえた personifiziertes Kapital として機能しているのである．》

Marx や Engels が画きだす世界は，たしかに純粋に客観的に追求された，人間抜きの社会構造のみの倒錯された世界のような印象をあたえる．だが，それは実はかかる必然的抽象にもとづくものにほかならないのである．

(a. a. O. Bd. 23 S. 167 f)

註（1） a. a. O. Bd. XXIII, S. 101.

（2） ebenda. S. 991.

（3） このような指摘をするものに，たとえば D. H. Cole が属する．cf. The meaning of marxism. p. 70 ff. 一般に，存在が意識を規定するというこの命題は critic をひどく当惑させているようである．したがって Cole のようにかんがえない人々，たとえば Maximilien Rubel などは，この‘規定する’の意味を，いちじるしくルーズにとることによって，ゆるい決定論としてこの命題を再解釈しようとする．Rubel は，Marx がみずから目を通した J. Roy 訳の《資本論》において，通常《déterminé》ないし《conditionné》と翻訳される《bedingt》が，《dominé》と仏訳されている事実を発見して，この命題を《Ce n'est pas la conscience des hommes qui *domine* leur existence, mais inversement, c'est leur existence

sociale qui *domine* leur conscience》と訳すべきだと指摘する．Maximilien Rubel, Karl Marx, Essai de biographie intellectualle, Paris. p. 312.

(4) a. a. O. Bd. III, S. 422 ff.

(5) Marx および Engels にはもちろんこうした歴史的関係に存在する個人についての発言は，いたるところに見いだされる．かれらは人格的個人と社会的諸関係の人格化としての個人との関係が偶然的となるのを，近代の特徴と見ていたほどである．

(6) Marxism において意識から独立した存在云々が問題にされるとき，これを素朴リアリズムといった理由のもとに，排除しようとしたり，認識論的論破を試みようとしたりすることがおこなわれている．が，ここから理解されるように，この指摘は，社会関係の Personifikation としての個人を遊離しようとする方法論的ふくみをもったものなのである．この点で，J. Witt-Hansen の意見は正しいだろう．cf. Historical Materialism, The Method, the Theories, book one, Munksgaard 1960. p. 54 ff. また存在が意識を規定する云々のかの命題の意味も，ここからはじめて理解がつく．つまり，個人にとって，自己の環境がさしあたり意識的にいかに define されていようとも，それは問題ではないが，ともかく意識をもつ主体以前に，かれは行動する主体，社会関係の担い手として活動し，そうして意識はこの活動にたいする自意識としてあらわれる点が，それによって指摘されているのである。

III

意志的な主体としての人格的個人の前提を踏まえたうえで，その心的動機をいちおう捨象し，かつ社会構成体とそこにおける諸関連との運動を，ある程度客観的に追求する可能性をとりだしたのは，Marx および Engels の功績である。かれらはこれを „Personifikation“ の概念の導入によっておこなったのである．したがって，まずはこの遊離化手続きを曲解することによって，かれらの決定論等に非難をむけるものがいるとすれば，それは的はずれのそしりはまぬかれないであろう．が，かれらの功績はこの点に尽きるのではない．われわれはこのおなじテーマの別の側面にも注意を

むけなければならない.

近時の社会学においてもこの Personifikation の概念にかなり類似したそれが，しばしば登場している．それは，所与の Institution の諸関係内部の地位をあらわす Role の概念であって，またこの Role にすっぽりはまり込む個人は，Role-actor もしくは Role-player としてかんがえられている[10]．したがって，われわれにとっての眼目は，唯物史観における Personifikation とこの Role や Role-actor (player) との差異を際立たせることにある．というのも，そのことによって唯物史観の構造の一面がさらに明確になるからである．

Role も Personifikation も，個人にとってはさしあたり外的で偶然的な，いわば一つの Zustand としてあたえられる．この面からいうならば両者のあいだに，そう大きな差異は見られない．だが，Role の概念は通常，そこに登場する個人の性格形成等々についてどのような影響力をもつかという角度からのみ，いいかえれば，最後まで個人にたいして外的な frame として把握されており，この点で，それによって social dynamic の問題に場面を移しかえることなどほとんど不可能である．事実，社会学において social dynamic が問題になるばあい，これとは何ら必然的関連のない別種の causation が求められている．このことに関して唯物史観ではどのような把握がおこなわれているのであろうか．やや長くなるが，われわれは Marx からの引用をもって，われわれの展開の端緒としよう．

《この (労働と資本との) 分離がひとたび前提されるならば，生産過程はそれをもっぱら新たに生産し，再生産，しかもますます大規模に再生産できるのみである．……生きている労働能力の客観的諸条件は，それに対立する独立の現存態として，生きている労働能力とは区別され，かつそれと独立に対峙している主体の客観態として，前提されている．再生産と価値増殖とは，すなわちこの客観的諸条件の拡張は，それゆえに，同時にみずからの再生産なのだが，それを，労働能力にたいして無関心かつ独立に対

峙している疎遠な主体の富としておこなうのである．何が再生産され，新生産されるかといえば，生きている労働のこの客観的諸条件の Dasein のみでなく，独立している，すなわち，この生きている労働能力と対立する，疎遠な主体に帰属する価値としてのその Dasein でもあるのだ．労働の客観的諸条件は生きている労働能力と対立する主体的現存態をかちえる．——資本から資本家が成立するのである．他方において，みずからの諸条件に対立する労働能力のたんなる主体的 Dasein は，かれに，それらにたいする，無関心な客観的形式のみを付与する．》

(K. Marx, Grundriss etc. S. 365 f.)

《われわれにいまやなお問題なのは直接的な生産過程である．われわれが市民社会を全体として考察するならば，いつでも，社会的生産過程の最終的成果としては，社会そのものが，すなわち社会的関係にある人間そのものが，あらわれてくる．生産物等々の固定した形式をもついっさいは，これらの運動における，もっぱら契機として，しかも消失する契機としてあらわれる．直接的生産過程そのものがここではもっぱら契機としてあらわれる．過程の諸条件および対象化は，それ自体みずからの同質の諸契機であって，それの諸主体としては，もっぱら諸個人が，しかもみずからの手で再生産したり新生産したりしている相互関係のなかにある諸個人があらわれるのである．かれら自身のこの不断の運動過程こそ，かれらがそこで自身をも，また……富の世界をも，ともに新たにつくり出す当のものなのである．》 (Ebenda. S. 600)

ご覧のように，Marx においても諸個人の出発点は，固定した形式をもつ客観的諸条件という Dasein である‘それは，諸個人の労働能力からは分離し，かつこの前提に立つ以上は，労働の主体的形式には，つねに無関心な客観的形式が付与され，かれらはたんに Role を enact するにすぎない．この関係はかなり static な関係とかんがえられてよいであろう．と

ころで，ここに注目すべき事実がある．それは——ここでもちいられている用語をそのまま使うなら——これら固定した形式をもついっさいが消失する契機としてのみかんがえられているということ，あるいは逆に積極的ないい方をするなら，同質の諸契機，すなわち不断の再生産や新生産として把握されていることなのである．Marx にあっては，この意味では，そこに個人がすっぽりはまりこむべき純粋な客体性，静止した Zustand は存在しないのである．もう少し具体的にいおう．

われわれにあたえられる社会的な役割は，人格的諸個人にとってはいかにも外的で偶然的である．われわれはそれを任意に動かし，変化させることはできない．それは，特定個人にたいしてではないまでも，しかし社会的な平均的個人にたいしては規制的であり，誰かがそれを演じざるをえない．とはいえ，それらといえども，というよりそれをふくむ社会的な関係の全体は，何も外的枠組みないし純粋構造として，宙に浮かんで存続しているのではない．むしろ，役割を遂行する個人がつぎつぎに不断に登場し，積極的にせよ，消極的にせよ，それらを引き受けつつ演じるのであればこそ，全体として一定の構造の外観を維持しているにすぎないのである．その内実は，というより一瞬々々をとってみるなら，社会的個人が一定の行動を繰り返すことを通じて，不断に過程的にそれを再生産し，新生産しているのだ．〈人間は，ある社会をつくろうなどとおもったためしはないけれども，みずからが絶えず個人として前進しようとするから，社会を前進させてしまう〉[(2)] というわけだ．社会が，そしてある Institution が一定の外的枠組みに似た固定的構造をもつというのは，一つの錯覚である．むしろそれは一瞬々々そのようなものとして反覆的=過程的に再生産されている，というほうが正確である．かくして，唯物史観においては，Personifikation は，まさしく Personifikation というかたちで行動することによって，自己をそのようなかたちで再生産ないし新生産する諸個人の活動にひきもどされるのである．それは，偶然的な外的 frame といった客観性の外観

をはぎとられ，主体的になり切ることのできぬ諸個人の活動の一定の形式として，流動化されるのだ．

ちなみにいって《資本論》における，Reflexionsbestimmungen に関する Marx の指摘は，この文脈から見て，きわめて興味あるものを提供している．かれは，こうした関係におかれた個人の意識の Quidproquo のことを述べているのだが，そこではつぎのようにいわれている．《そうした反省的諸規定には一般に一種独特のものがある．この人間が，たとえば皇帝であるのは，他の人間たちがかれにたいして臣下として関係する（ふる舞う）からにすぎない．それなのに，かれらは反対に，かれが皇帝だから，自分たちは臣下なのだと信じている．》

それはともかく，以上の記述では本来の意味での意志的決断の主体としての人間の面にはほとんど触れられていない．そこで，いまや問題になるのは議論のこの側面であろう．というより，いわゆる人格的個人と社会関係の Personifikation としての個人との関係の問題であろう．

先立って結論的にいうならば，唯物史観にあっては，社会関係の Personifikation として遂行される諸個人の活動が，意志的な人格的個人の活動の Grund として把握されている，といえるであろう．少なくとも，この分離が生じる可能性があたえられるばあいには，である．

もちろん Marx や Engels はこの分離が一般的にまたつねに存在しているとは見ていなかった．かれらは従来の歴史においてこの分離が潜在的には一貫して存在していたとかんがえていたものの，しかし諸個人の意志や欲望の歴史的相対性のゆえにこれが explicit に諸個人の反省的自覚にのぼるとは見ていなかったのである．すなわち《従来の解放の根底にはかぎられた生産力しかなく，社会の全体にとって不十分なこの生産は，ある発展を可能ならしめるにしても，一方が他方を犠牲にして欲望を満足させ，かくして一方——少数者——が発展を独占してのまうのに，他方——多数者——は……あらゆる発展から閉め出される，というぐあいであった》か

ら，少なくともこの多数者にとっては，理念的にあたえられる個人の活動や享受の全体が，それの現実の活動や享受を，社会関係の Personifikation としての個人をしりえに，ひとりあるきを開始する可能性はあったのだ．にもかかわらず，他方で《諸個人が……そこで相互に交渉しあう諸条件は，かれらの個性に属している諸条件であって，かれらにとって何ら外的ではなく，……したがって，かれらの Selbstbetätigung の諸条件であり，かつこの当の Selbstbetätigung によって生産されている[5]》ことも事実である以上，この分離が観念的に肯定されたり，あるいはそれ自体存在しなかったりしたのである．

とすれば，この分離が生じたり，人格的な本来の意志的個人が出現したりするのは，どこにおいてであろうか？　換言すれば，自分たちの活動環境を何らかの社会意識によって反省的に統御しようとする動きは，どのような時点に開始されるのであろうか？　他国との発展差からくる自己の社会環境の狭隘性の自覚という，特殊な外的関係もかんがえられてはいる．だが，これは本来的なものではない．一般的には，生産力と生産関係の盾盾によって，と唯物史観は回答している．要するに，社会的関係の Personifikation としての個人の活動（生産力[6]）が，そのようなものとして遂行されればこそ，かえって，全体として見れば，この Personifikation の鉄のコルセットの巾が縮まったり，そこに種々の impediment が乱入してきたり，それら相互のスムースな運動が停滞してしまったり，するばあいなのである．諸個人にはこのコルセットがあたえられる以上，それを身につけ，このことによって意識的にせよ無意識的にせよ，社会を再生産する．私は個人のこの活動のありかたを第一次実践構造と名づけたい．が，かれらはこの第一次実践によって社会を動的に再生産すればこそ，こんどはみずからの活動範囲を狭隘化し，この運動にたいして意識的に抵抗的=防御的介入を試みざるをえなくなるのである．私はこの活動を第二次実践構造と名づけたい．そしてこのばあい第一次構造は第二次構造の根拠をなして

いるのである．

ちなみにいって《資本論》における一貫した特徴的接近はつぎのようになされている．すなわち，まずは特定の役割をふくむ客観的関係が単純再生産される条件，要するにそれが構造的に無変化なまま持続的に機能する閉ざされたモデルがかんがえられる．ついでこのようなモデルが資本の本質と前提のゆえに成立しえないことが明らかにされ，そのばあいにこの役割部分にどのような攪乱的影響がもちこまれるか，どのような合理化的縮小がとり入れられるかが追求されるのである．表面切ってでないまでも，かくしてこの関連と functional な関係のなかで《労働者階級の反抗》がどう高まるかが究明されているといってよい．種々の労働保護立法やそれにたいする資本家がわの反撃の事情にたいする歴史的記述をおもい起して見ればよい．

それはともかくとして，Marx や Engels は実践のかの二次的構造それ自体についてかなり楽観的な期待，そこのみに社会改良の契機を見るほどの期待を寄せていただろうか？　かれらはこの点にはいちじるしく慎重な態度で一般にはのぞんでいた，といってよいようである．これがまたかれらの歴史的決定論にたいする非難の口実をあたえている．が，かれらがかく慎重にのぞんだ理由は，種々かんがえられるにしても，大きくいって二つあるようである．つまり，かれらは social control の基本原理をどこまでも power において把握していたということと，第二次実践を誘引する多少なりとも反省的な思想，イデオロギーといったものを，どこまでもやはり社会の一部と把握していたことが，それらであろう．まず後者について．このことが指摘されると，人間の思想等々が一社会の反映とか，その自動的所産とかにすぎぬものと解釈され，ただちに多くの異議が唱えられている．が，Marx や Engels にとっては，実はこんなことはどうでもよかったのである．思想等々はまさにそのようなものであるがために，その由来は遙か古代でもあれば，外国でもあるし，個人の突飛な思い付きであ

るかも知れない．が，いやしくも一思想が具体的な社会的影響力をもつとしたら，それは，これが諸個人の現実の活動のうちにこだまし，現実の生活の一部に同化しうるかぎりのことでしかない，とかれらは見ていたのである．したがって，外的に移入された思想等はただちにみずからの生活環境の意味で解釈され，このかぎりで力をもつ以上，それだけを抽象的に引離して，それに独自の独立の力を帰することをかれらは拒否した，といえるであろう．もちろんかれらはそれに，自己の活動環境をより明確に define し，自覚をつよく促す機能を十分に認めている．しかしこれとは異なるより高尚な意味はそれに帰さなかった．前者について．power の term で social control の問題がかんがえられる以上，権力集中の可能的条件がただちに問われねばならない．《個々の諸個人が Klass を形成するのは，もっぱら別の Klass に対抗して共通の闘争をおこなわざるをえないかぎりでのことで，そのほかのばあいはおのおのがふたたびそれぞれ反目的な競争関係にある[7]》と見ていたかれらには，道徳的=政治的規範意識によるたんなる自発的団結とか，生活環境の事実を無視した一方的 manipulation とかを重く見ることはできなかったのである．むしろ，かれらは社会関係の Personifikation としておこなわれる活動やその社会的帰結との有機的関連をつねに維持し，ここに権力集中を可能にする与件を見ていたのだ．一般的にいうなら，Marx や Engels は第一次構造と第二次構造とのあいだに，分離の可能性を認めながらも，後者が前者にたいして対応機能をまったく欠いたまま独自の運動ができるとは見なかったのだ．

註（1） たとえば，S. F. Nadel, The Theory of Social Structure (London 1957) p. 12, H. Gerth and C. W. Mills, Character and Social Structure (London 1961) pp. 22–23 などを見よ．

（2） Marx=Engels. a. a. O. Bd. III S. 196.

（3） a. a. O. Bd. XXIII, S. 72 n.

（4） a. a. O. Bd. III, S. 467.

（5） Ebenda. S. 71.

(6) ここではこの理論がすべて人間のがわから眺められているから，生産力＝諸個人の活動ととられるべきである。一般的にいって，この側面を無視することによって，唯物史観にはひどい混乱と乱暴な非難がもちこまれている．生産力＝生産手段＝技術と見なすような立場がそれで，その典型的なものに，K. Federn, The Materialist Conception of History, A Critical Analysis (London 1939, p. 7), M. M. Bober, Karl Marx's Interpretation of History (Cambridge, 1950, pp. 17 ff), H. B. Acton The Illusion of the Epoch (London, 1953, pp. 159 ff) などがある．

(7) a. a. O. Bd. III, S. 54.

IV

以上において私は，唯物史観の一面に，もっぱらそこに登場する〈人間〉のがわから照明をあてることを試みた．通常ここに述べられていることは，具体的な社会構造が導入されることによって，階級，階級闘争などとしてかたられるし，またこの構造のほうは生産力と生産関係，そして上部構造などとしてかたられている．しかし私はそうした用語はほとんどもちいなかったし，まだ具体的な内容に立入った論述もいっさいこれを避けた．というのも，私の意図は，これらの諸概念やその行使を可能にする抽象の妥当性をあらためて明らかにしてみることにあったからである．いいかえれば，唯物史観という社会=歴史記述の方法が何をどのように整理して述べようとめざしたものであるかを明らかにしようとしたからである．このかぎりで，私のこの一面的かたよりもゆるされであろう．

最後に私は最初にあげたいくつかの問題に回答しておかなければならない．従来の記述からどのような結論がひき出せるであろうか？ Marxism の唯物史観が人間抜きの歴史観であるという非難にたいしては，われわれは，それが二重の意味で人間による歴史制作の記述の試みである，と回答することができるであろう．通常の歴史観では，歴史は奇妙なことに，その構造変化を招来するような sensational な結接点の局面でのみ，それが

人間によりつくられるというぐあいに記述されているにすぎない．しかもこの過渡期における人間のどちらかというとかなり偶然的な決断とか，権力の移行とかに焦点がしぼられてしまったりする．Marxism においても，もちろんこの意味での，人間による歴史制作，種々の意識的決断と人間的情熱にともなわれて，人間がみずからの社会関係を多少なりとも統御しようとするような行動を，記述することは事実である．けれども，それはたんに歴史のこの特殊な sensational な局面の記述にのみにとどまるのではない．しばしばいわれる《人間が歴史をつくる》という表現は，このことをあらわすものとしてうけとられるむきがあるが，Marxism はけっしてこの面にだけとどまっているのではない．むしろそれは，外見上固定的構造性をもつように見える社会の定常状態をも，その人間的根拠にまでさかのぼって，かれらの行動の特殊な Objektivation として，あるいはそれの不断の再(新)生産過程として，流動的に描き出すのである．さらにこの内部での不断の変動を通じて，権力配分のいかなる変化が，あるいは構造変化へのいかなる傾向が準備されていくかが，客観的に人間のがわから追求されていくのである．《資本論》に接する読者はいつも不思議な気持におそわれる．というのも，その記述が二重の形態でおこなわれるからである．まず sachlich な経済的諸現象がそのものとしてとりあげられ，これがただちに価値にまで還元されていくからである．が，これこそが，あらゆる社会の sachlich な関連を人間の活動（労働力）の特殊な Objektivation まで，つまり，その再生産過程までさかのぼってかんがえようとする具体的形態なのである．ごく一般的にいうと，Marxism は，人間が多少とも involuntarily に歴史をつくり，それを反省的に多少とも voluntarily に再統合しようと試みる，この二重の process を記述しようとするのである．Alfred G. Meyer はつぎのように述べているが，この指摘は正しいだろう．

《マルクス主義が歴史の一元的見解であるということは，commonplace

observation である．しかしながら，この monism の本質は，よくいわれるように，歴史のすべてを経済的発展に還元することではない．それはむしろ，人間が歴史の主体であるにとどまらず，また環境変化によって自己を変化させる歴史の客体でもあるということを同時に主張しながら，一切の生起を人類の sovereign actions に還元するような historiography のために (in favor of), both (divine) and (dead) matter を排除することにあるのだ.[1]》

さて，このことが了解されるとすれば，唯物史観にむけられる公式主義の非難にこたえるのは何でもない．だが，私がこれにこたえるよりも，Marx 自身がその点をいかに見ていたかを，そのまま引用するほうがはるかに説得的であるだろう．私が II で引用した《資本論》のかの部分をふくむ《本源的蓄積》に関する記述が時空をこえてほとんどあらゆる国の経済的発展にアープリオーリに当てはまるとしたロシアの一批評家 Жуковский に，Marx はあまり知られていない書簡のなかでこたえている：

《本源的蓄積の章は，西ヨーロッパで資本主義的経済秩序が封建的済秩序の懐 (entrailles) から生れ出る際にたどった道を跡づけようとしたにすぎない．それは，生産者を生産手段から引離すことによって，前者を賃労働者に，そして後者の所有者を資本家に変化させた歴史的運動を明らかにしているのである．……が，かれは西ヨーロッパでの資本主義の成立についての私のスケッチを一般的な発展過程の歴史哲学的理論に絶対的に métamorphoser させずにはおかないのである．あらゆる民族がおかれている歴史的環境がどのようなものであっても，……かの経済的構成体に到達するためには，それが宿命的に imposer されている，というのだ．しかし，私はかれにお許しを乞わなければならない．……際立って類似した事件さえ，歴史的に異なった milieux において生起するばあいには，まったく異質の結果にゆきつくものである．これらの発展のおのおのを別個に研究し，そうしてそれらを比較してみれば，これら諸現象を解くカギはすぐ見

つかるだろうが，しかし，その最大の長所が超歴史的である点に存する一般的な歴史哲学の理論の passe-partout をもって，そこに到達することは断じてありえない.》 (M=E. Ausgewählte Brief S. 366 ff.)

Marx 自身がみずからの記述について保持していた見解は，ご覧のとおりである．それはかれの理論がよって立っている前提からして，それ以外ではありえないのである．かれが Hegel やその他の人々にむけた批判のほとんどが，一般的な公式的モデルを確立しておいて，それを歴史的な現実のなかにひきづりこんだり，このモデルを現実ととり違えたりした点にむけられているのを見れば，よく了解がつくであろう．Marx は，現実の抽象的モデルをつくり，それによって歴史的発展の内部構造を解明し，説明しようとする思考の手続きと，現実の歴史的発展とを画然と区別して，つぎのように述べた.《抽象的なものから具体的なものにむかって上向していく方法は，具体的なものを aneignen するための，思考にとってのやり方 (Art) にすぎず，それを *ein* geistig Konkretes として再現しようとするものなのである．しかしそれは，具体的なものそのものの成立過程では断じてない.》 Marxism にたいしては，事実いろいろの批判をむけることが可能ではある．しかし，われわれはもし positive な批判をのぞむのであれば，うえで指摘した諸点への考慮は欠かせないであろう．

註 (1) A. G. Meyer, Marxism—The Unity of Theory and Practice. (The University of Michigan Press, 1963) p. 106.

(2) K. Marx, Grundrisse d. Kr. d, pol. Öko. S. 22.